チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2020年5月NO.48

SMILES

https://www.childfund.or.jp

特集

「杉並区民の手でネパールに学校を!」キャンペーンの10年

▲杉並区の公式アニメキャラクター、なみすけと一緒に校舎の完成を喜ぶネパールの子どもたち

ChildFund Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、
アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、
家族と地域の自立を目指した活動をしています。

地域と共に歩んだ

「杉並区民の手でネパールに学校を!」キャンペーンの10年

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年に国際協力活動を開始して以来、
東京都の杉並区に事務所をおき、日本全国の多くの方々よりご支援いただき、活動をおこなってまいりました。
しかし、長年事務所をおいているにも関わらず、杉並区民の皆さまに
私たちの活動を知っていただく機会をつくることができず、区民の皆さまと一緒に何かできないかと
検討を重ね、誕生したのが「杉並区民の手でネパールに学校を!」キャンペーンでした。
杉並区役所をはじめとした行政や学校、企業、そして区民の皆さまと
一緒に歩んだ10年をご紹介いたします。

初めて参加する方にもわかりやすいキャンペーンを

このキャンペーンは、書き損じハガキ(未投函のハガキ)や未使用の切手を活用して、ネパールの子どもたちの学ぶ環境を整えます。当時は、チャイルド・ファンド・ジャパンのことを知らない方が多かったので、いきなり「国際協力のために寄付してください!」とご協力をお願いするのは難しいだろうと考えました。そこで、以前よりおこなっていた未使用のハガキや切手を集める活動を杉並区でもおこなうことにしました。初めての方でも、また子どもたちでも気軽に参加でき「身近にあるもので、ネパールに学校をつくりましょう!」という、わかりやすいキャンペーンづくりを目指しました。

キャンペーン期間はハガキや切手が多く集まる12月～2月の3ヵ月と決めました。

区役所の大きなサポートを得る

杉並区でおこなうキャンペーンのため、まずは区役所に相談、と杉並区役所を訪問しました。後援をいただくまでに何度も足を運ぶことを覚悟し、当時の区民生活部文化・交流課に緊張しながらご相談しました。すると、私たちの話を熱心に聞いてくださり、その後すぐに教育委員会のご担当者様をご紹介いただきました。そして教育委員会からも後援をいただくことができ、なんと区内の小学校、中学校全校にチラシを配布することが決まりました。

また、区報や杉並区交流協会ニュースレターへの掲載、ハガキや切手を入れる寄贈BOXの設置も決まり、次々と話が進みます。手探りで動いていたキャンペーンが多くの方の共感を得て、拡がっていきました。

▲区報「広報すぎなみ」掲載内容（2019年1月15日号）

◀毎年3万枚を配布しているチラシ

▲寄贈BOXは区役所1階ロビーにも設置しています

ネパール人の方々からも応援が

日本に暮らすネパール人の方々にもこのキャンペーンを知っていただきたいと思い、次に向かったのは駐日ネパール大使館でした。当時のネパール特命全権大使が温かく迎えてくださり、私たちの話をじっくりと聞いた後、「ネパールの子どもたちのためにありがとうございます」と後援を承認してくださいました。また、2013年に杉並区内にできた世界初のネパール人学校「エベレスト・インターナショナルスクール・ジャパン」からも後援を得ることができました。

6つの学校に校舎や教室をつくりました

10回のキャンペーンを通して約2,300名の方にご協力いただき、ネパールにある6つの学校に校舎や教室をつくることができました。

1校目
サラスワティ小学校

2校目
ブメタン小学校

3校目
ゴルマダンダ小学校

4校目
ビメシュウォール校

5校目
デビ校

6校目
ジャナジャグリティ校

明るい日差しが入る新しい教室には机やイス、教材も整えます。ネパールでは2015年4月に大きな地震がありましたが、建設した校舎が倒壊することはありませんでした。

また、その後建設された学校は、さらに耐震性を強化した設計になっており、災害から子どもたちを守ります。

6校目のジャナジャグリティ校は、外務省の日本NGO連携無償資金協力に杉並区民の皆さまからの支援を加え、建設しました。国と自治体、区民が一緒になってつくった校舎です。10年間継続してキャンペーンをおこなった成果が確実にネパールに届いています。

▲新しい校舎は窓もあり、日差しが入る明るい教室です

▲山の中腹にある学校には1時間以上も歩いて通う子どもたちがいます

杉並区とネパールをつなぐ架け橋に

区内の小学校や中学校に出前授業へ行った際、「これ知っている人？」とキャンペーンのチラシを掲げると、「あ、毎年もらうものだ」「ハガキや切手を集めているんだよね」と子どもたちが答えてくれます。キャンペーン開始当初、小学校1年生だった児童は、毎年このチラシを受けとり、既に中学校を卒業しています。探りながら始めたキャンペーンでしたが行政との協働が実現し、毎年の継続した支援により、ネパールの6つの学校に校舎や教室を建設することができました。ちょっとした活動でも継続しておこなうことが大きな成果につながることを実感した10年でした。杉並区の在住外国人数第3位はネパール人(約2,200名)です。今後もキャンペーンを通して、杉並区の皆さまと一緒に、ネパールを、そして国際協力を身近に感じる機会をつくってまいります。

●協働のカタチ●

エベレスト・インターナショナルスクール・ジャパン
チラシ配布、イベント等への参加

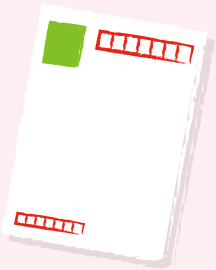
駐日ネパール大使館
チラシ配布、イベント等への参加

杉並区
区報掲載、区内施設へのチラシ配布
区役所1階ロビーへの寄贈BOX設置

杉並区教育委員会
校長会での周知、
区内小中学校へのチラシ配布・寄贈BOX設置

杉並区交流協会
メールマガジンの配信、
ニュースレターへのチラシ同封

コラム1　キャンペーンに参加した子どもたちの声



小学生の私でも世界の人のためにできることがあることを知りました。

書き損じはがきを集めたりするのは小さなことですが、ネパールの子どもたちのためになると思うと、とてもやりがいを感じます。(立教女学院小学校)

継続して協力すれば、自分たちもネパールに貢献できることを知りました。世界には困っている人がたくさんいます。他にもできることがないか、考えています。(荻窪中学校)

コラム2　ジギャン・クマル・タパさんからのコメント

私はネパールの首都カトマンズ郊外に7人兄弟の末っ子として生まれましたが、姉たちの中には学校に一度も行ったことがない人もいます。私は男の子だったこともあり4キロ離れた学校に行かせてもらいました。しかしクラスメイトの中には親が亡くなった、兄弟が生まれた、農作業が繁忙期になったなどの理由で学校に来なくなり、そのまま退学してしまう子も多くいました。

私は高校卒業後、日本語を学び日本で高等教育を受ける機会に恵まれました。この過程で多くの方や団体にお世話になりました。大学院を修了し、現在は就職していますが、そのかたわらネパールと日本の架け橋を目指して様々な活動をしています。学校に行けなかったにも関わらず私の面倒をみてくれた姉たちの分も、泣く泣く中退せざるを得なかったクラスメイトの分もしっかり勉強し、ネパールの子どもたちを取り巻く厳しい環境を変える力になれたらと思っています。

1979年ネパール生まれ。かながわ国際交流財団職員・駐日ネパール大使公式通訳。「ネパールと日本の架け橋となること」を自身のミッションとし、かながわ国際交流財団において、学生の外国に対する理解を深めるプログラム企画立案や講演活動などで外国へ興味を持つきっかけを作ることに従事。

チャイルド・ファンド・ジャパンのことは、杉並区で開催された講演の講師を務めた際に知りました。「杉並区民の手でネパールに学校を！」キャンペーンでは、私が幼少期に経験したような教育的課題が今なお続いている地域で学校を建てる支援をおこなっていると聞き、大変感激しました。日本の子どもたちがネパールを知り、世界の状況に目を向ける大変良い機会にもなりますし、自分の今の環境に感謝する気持ちが生まれるのではないかと思います。ネパールと日本双方にとって素晴らしい取り組みだと思います。

キャンペーンを立ちあげたメンバーが振り返る10年

キャンペーンを企画した松浦宏二（現事務局次長）、小保方珠実（現コミュニケーション・マーケティング部長）と、最初に杉並区役所でご対応いただいた川上幹雄さん（現杉並区交流協会事務局次長）が10年を振り返ります。

▲右から川上さん、小保方、松浦

最初の印象は?

松浦 最初にご相談に伺った際、どのように感じられましたか。

川上 NPOさんが実施するイベント等への後援依頼について相談をうけることは時々ありましたが、このようなキャンペーンのお話は初めてでしたので内部でも少し検討する必要があると思いました。子どもたちでも気軽に参加できる内容でしたし、区内に拠点を置き長年活動している実績があり、また認定NPO法人でしたので、検討した結果、後援を決めました。

協力の輪が拡がる

小保方 その後、すぐに教育委員会の方をご紹介いただきました。区役所だと部署間をまたいでのお願いは少し時間がかかるのかなと覚悟していたのですが、すぐに対応していただき、嬉しかったです。

川上 「ネパールに学校を建設する」キャンペーンですから、学校と言えば、教育委員会だろうと思い、ご紹介しました。その時は、うまくつながるかは正直私にもわかりませんでしたが、「とりあえず動いてみないとわからない」と思いましてね。

小保方 区役所1階にハガキや切手を入れる「寄贈BOX」を設置いただき、広報すぎなみ（区報）にも毎年掲載いただいています。今年は杉並区広報課のフェイスブックでもご紹介いただき、どんどん協力の輪が拡がっているのを感じます。

川上 商店街にもご協力いただきましたね。少しでも多くのハガキや切手が集まれば、と思って動きましたが、成果を出すことができて良かったです。

小保方 2014年には杉並区役所の2階で、建設した学校や子どもたちの写真を展示する機会もいただきました。あの展示会も川上さんからのご提案でした。

川上 そうでしたね。当時は5回目のキャンペーンを実施している時期でもあり、区民の関心も少しずつ高まってきているように感じましたのでご相談しました。当時の在日ネパール大使にもご覧いただく、とても良い機会になったと思います。あの時も区長との懇談会をやりましたね。懐かしいです。

小保方 キャンペーンを続けていく中で、各部署のご担当が異動等で代わられることがありましたが、前任の方がきちんと後任の方に引継ぎしてくださっているので、大変助かりました。

川上 このような活動は継続することに意味があります。担当が代わって途絶えることはよくないですよね。私だけでなく、他の職員にもきっとそのような想いがあるのでしょう。

あれから10年、そしてこれから

川上 10年目を迎えることができて、感慨深いものがあります。開始当初に比べ、杉並区内のネパール人の人口は4倍に増え、ネパールに対して親しみを感じている区民の方も増えてきていると思います。杉並区交流協会でもネパール語講座をおこないました。

松浦 これからは学校でも日本とネパールの交流の機会が増えるといいですね。

川上 チャイルド・ファンド・ジャパンには、今後も未来を担う子どもたちへの支援を、具体的にはネパールを含め途上国に暮らす子どもたちのために、学ぶ場を作っていってほしいと思います。このキャンペーンは継続していきたいですね！

松浦 小保方 ぜひよろしくお願いします！！

キャンペーン10周年特別懇談会を開催

10周年を記念し、3月19日（木）に杉並区役所で特別懇談会を開催しました。懇談会には田中良杉並区長、井出隆安教育長をはじめとした杉並区役所関係者、ジギャン・クマル・タパ氏（ネパール日本研究センター代表）、外務省国際協力局からも佐藤靖民間援助連携室長等の皆さまにご参加いただきました。

懇談会は当団体副理事長の福嶋美佐子による開会挨拶で始まり、続いてキャンペーンご報告の動画を上映し、これまでの経緯と成果をお伝えしました。

懇談会の中で、田中区長は「ネパールの子どもたちが学ぶ場を得て成長することに関わることができてうれしい。いつか私もネパールに行ってみたい」と感想を述べられました。また、佐藤室長は「ODAと杉並区が一緒になってネパールの子どもたちのために支援できたことを大変嬉しく思います。地域間の交流がますます活発になることを望み、また外務省がそのサポートをできると嬉しいです」とおっしゃっていました。

写真撮影の際には、杉並区公式アニメキャラクターなみすけも一緒に、会場の場をなごませてくれました。杉並区民の皆さまからの温かいご支援が、確実にネパール現地に届けられ、区民・行政との協働が実を結んだ10年間であったことをご報告する良い機会となりました。

動画はYouTubeでご覧いただくことが可能です。https://youtu.be/yJNyVdAIceI

動画（5分）のQRコード▶

▲記念撮影の様子（前列右側より佐藤室長、田中区長、ジギャン・クマル・タパ氏、当団体副理事長の福嶋）

全国からもたくさんのハガキや切手、メッセージが届いています！

チャイルド・ファンド・ジャパンでは、全国の皆さまからも書き損じハガキや切手を募集しています（通年）。今年は、読売新聞と朝日新聞に掲載されたこともあり、1月中旬から多くのハガキや切手が事務所に届きました。届いたのはハガキや切手だけではありません。「わずかばかりですが送ります。お役に立てれば幸いです」「新聞の記事を読み、未使用のはがき、切手が支援になることを知りました。頑張ってください」と温かいメッセージをつけて一緒に送ってくださる方もいらっしゃいます。

例えば、63 円のハガキの場合…

10枚で、ネパールの子どもたちが教室で使うざぶとんを1つ贈ることができます

140枚で、低学年の子ども用の机を1つ贈ることができます

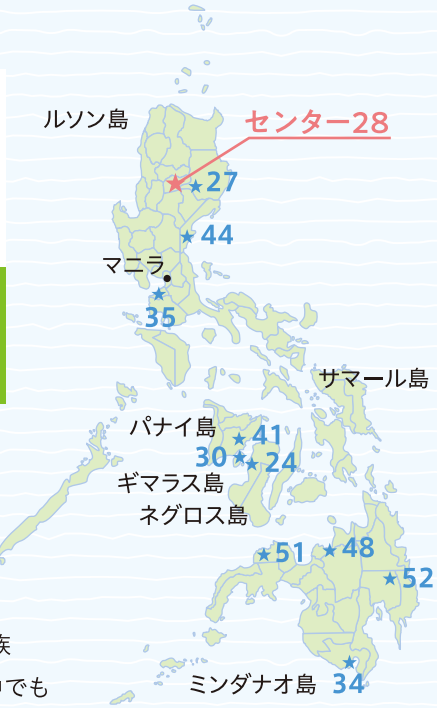
ハガキが寄付になる理由

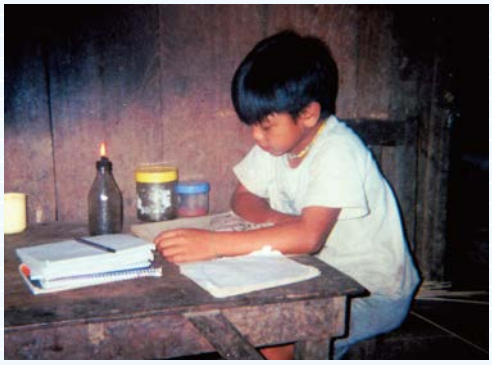
1. **ハガキは、郵便局で新しい切手と交換します。（ハガキ1枚につき5円の手数料を支払います）**
2. **交換した新しい切手と皆さまに送っていただいた未使用の切手は、チャイルド・ファンド・ジャパンから支援者の皆さまにお手紙や機関紙等を発送する際に使います。**
3. **使用した切手と同じ金額を、予算として組んでいた通信費からプロジェクト実施費用に振り替え、支援活動に活用します。**

たくさんのハガキや切手が事務所に届いていますが、コロナウイルスの影響により集計作業に遅れが出ております。ご協力くださった皆さまお一人おひとりに受領のご連絡ができず、大変申し訳ございません。お送りいただいたハガキや切手は、アジアの子どもたちへの支援として大切に活用いたしますことをお約束いたします。皆さまにはご理解のほどお願い申しあげます。

フィリピン、イフガオ州における支援終了のご報告

カタグワン・センター（イフガオ州、センター28）は、2020年5月をもって支援活動を終了します。皆さまからの温かいご支援に心よりお礼申しあげますとともに、これまでの活動の成果をご報告いたします。




ランプの灯りで勉強するチャイルド（2008年撮影）

センター28のチャイルドたち

センター28は1995年に活動を開始しました。25年の活動期間に、実に680名の子どもたちがスポンサーシップ・プログラムの支援を受けました。支援開始当初、チャイルドとして選ばれたのは、少数民族の人々が暮らす山岳・丘陵地帯の村、その中でも厳しい生活を強いられている世帯の子どもたちでした。現金収入が少なく、教育への最低限の支出を捻出することさえもできない世帯がほとんどでした。そのような環境に暮らす子どもたちが学校に通い続けられるよう、センター28はすべてのチャイルドに学用品や制服の提供などの支援を、必要とするチャイルドたちに補習やカウンセリングなどの支援を行いました。また、リーダーシップ研修やチームビルディング、サマーキャンプやいじめ防止研修など、内面的な成長を促すための様々な支援を行いました。また、栄養不良だったすべてのチャイルドが栄養改善の支援を受け、標準の健康状態を保つことができるようになりました。

家計収入向上や住民主体の組織づくりの支援も行い、住民組織に参加する家族や人々は協同組合の運営、工芸品の制作、食材の調理、小規模ビジネスの管理などに関わる支援を受けました。25年の間に10の住民組織が支援を受け、自立後は住民組織が、カトリック教会の社会活動組織のもと、地域の人々の暮らしを改善させていく役割を担います。

センター28のケネディのストーリー

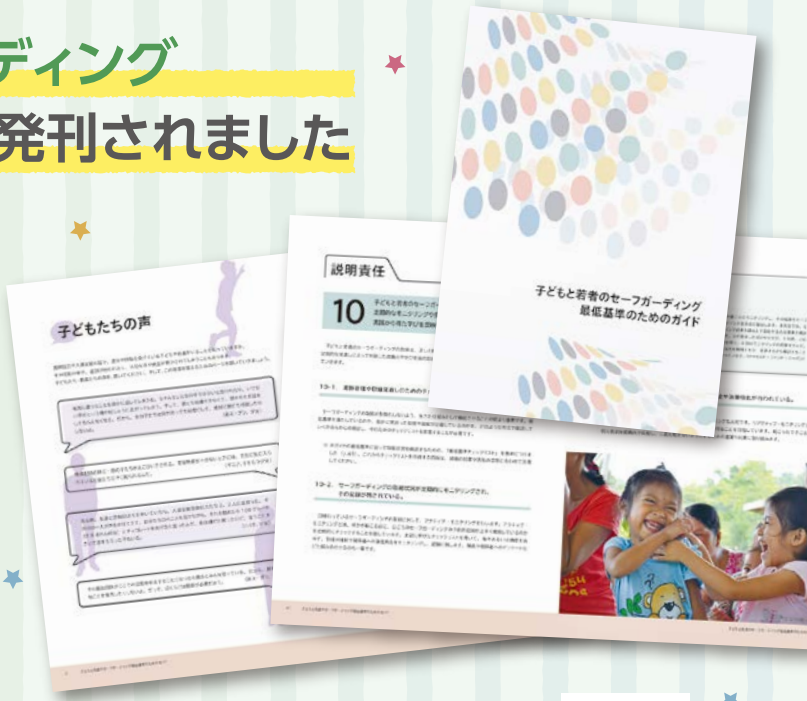
ケネディの両親は農業で生計を立てていましたが、得られる収入は少なく、4人の子どもに十分な教育を受けさせることはできませんでした。しかし、両親は教育の大切さを理解していました。子どもたちになんとしても学校を終えて欲しいと願い、ケネディはスポンサーシップ・プログラムの支援を受けられるようになりました。様々な支援の中で特にケネディに大きな影響を与えたのは、内面的な成長を目指したプログラムです。サマーキャンプや演劇などへの参加を重ね、ケネディは自尊心を持つようになりました。

ハイスクールに進学すると、リーダーシップを発揮するようになりました。特に、人前で話すことに特別な才能をみせました。「ケネディが話し始めると子どもも大人もみんな聞き入ってしまうし、柔らかい口調に誰もが好感を持った」と、センタースタッフは話します。ケネディ自身もその才能を自覚するようになり、コミュニケーションのスキルを伸ばす努力を続けました。ケネディは「支えを必要としている人たち」のために、自分の能力を活かすことに決めました。大学に進学して社会福祉学を専攻し、現在は子どもたちを薬物依存から守る仕事に就いています。「今の自分があるのは、センターの活動に参加したおかげです。深く感謝しています」とケネディは話します。

サマーキャンプの読み聞かせコンテストで一等賞

大学の卒業式で両親と

「子どもと若者のセーフガーディング最低基準のためのガイド」が発刊されました



チャイルド・ファンド・ジャパンでは、「子どものセーフガーディング方針」に沿って、私たち自らが子どもに危害をもたらすことのないよう、予防策や対応策の整備・強化に取り組んでいます。この取組の一環として、特定非営利活動法人国際協力NGOセンター（JANIC）の「子どもと若者のセーフガーディング・ワーキンググループ」に参加しています。

今般、このワーキンググループに属する5団体*1が協働し、「子どもと若者のセーフガーディング最低基準のためのガイド」を作成しました*2。本ガイドで紹介する「子どもと若者のセーフガーディング最低基準」は、子どもを取り巻く多様かつ複雑なリスクを未然に回避し、子どもを守るうえで有効な体制や手続きを11項目にまとめたものです。

団体での取組事例も盛り込まれています。最低基準の一つ、「リスク分析と軽減策」の事例として、学校主催による事業地訪問の受入の経験が紹介されています。そこでは、訪問する日本の生徒、訪問を受け入れる事業地の子どものそれぞれに、どのようなリスクがあるかを洗い出しました。そして、日本側が考える懸念と事業地側が考える懸念をお互いに共有することで、リスクを軽減するための具体策を立て、訪問の受入が可能になりました。

このガイドが、子どもや若者支援に関わる団体や組織で活用されることを期待しています。

ガイドのPDFファイルをダウンロードいただけます。
https://www.childfund.or.jp/files/2020_CS_guide.pdf

＊1 特定非営利活動法人ACE、公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン、特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
＊2 本ガイドは、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが受託した外務省の令和元年度NGO研究会「日本の国際協力NGOにおける『セーフガーディング』の取組促進のための提言とガイドラインの作成」事業の一環として、国際協力NGOセンター（JANIC）の「子どもと若者のセーフガーディング・ワーキンググループ」に属する5団体により共同作成されました。

インフォメーション　コーナー

お知らせ　寄付つき自動販売機のご紹介

寄付つき自動販売機でお茶やジュースなどの商品をご購入いただくと、一定額がチャイルド・ファンド・ジャパンへ寄付されます。このたび、サントリーに加え、コカ・コーラも寄付つき自動販売機の設置が可能になりました。企業や団体の皆さま、自動販売機を活用した社会貢献活動をぜひご検討ください!

お知らせ　団体リーフレットを置いていただけませんか?

前号の「SMILES」47号で、ご友人やお知り合いの方にチャイルド・ファンド・ジャパンの活動をご紹介いただきたく、専用のリーフレットを同封いたしました。このたび、このリーフレットを一般向けに改訂いたしました。リーフレットを置いていただける店舗などを募集しております。支援の輪を拡げる活動にご協力をお願い申しあげます。

ChildFund Japan　**Vision Mission**

**チャイルド・ファンド・ジャパンは
ここに掲げるビジョン（目標）、ミッション（使命）に
基づいて活動します。**

ビジョン（目標）
**すべての子どもに
開かれた未来を約束する
国際社会の形成**

ミッション（使命）
**生かし生かされる
国際協力を通じて
子どもの権利を守る**

チャイルド・ファンド・アライアンス　ChildFund Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う11団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

＜チャイルド・ファンドだより SMILES（スマイルズ）＞

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
理事長／長山信夫　事務局長／武田勝彦
TEL. 03-3399-8123　FAX. 03-3399-0730
E-mail:childfund@childfund.or.jp
URL:https://www.childfund.or.jp/

2020年5月発行
〈デザイン〉
モスデザイン研究所
〈印刷〉
吉原印刷株式会社